

自己評価					学校関係者評価						
学校運営計画（4月）				評価（総合）							
学校運営方針		志をもって意欲的に学び、自律心と思いやりの心をもつ、たくましい生徒の育成をめざす。創立120周年「創～新しい時代を切り拓く糸高」のもと、生徒一人ひとりの「確かな学力」と「豊かな心」「健やかな身体」の三位一体的な形成を基盤とし、「生きる力」を醸成する。			自己評価は						
昨年度の成果と課題		年度重点目標		具体的目標							
<p>昨年度も、新型コロナウイルス感染症の影響による出席停止等の生徒を対象に、生徒の学習機会確保のために、オンラインによる授業コンテンツの配信などを全教職員で行った。授業コンテンツの多くは、「わかりやすい」「何度も繰り返し視聴できる」など、生徒に好評であった。今年度も、生徒の個別最適な学びの環境を充実させ、学力向上及び全人的な成長のため、ICTの積極的活用、「ICEモデル」と観点別評価の推進による授業改善、生徒理解・支援の深化など、すべての教員の教師力を高めていく必要がある。</p> <p>「糸高志学」は、地域Itoshimaから学び、生徒一人ひとりに多様な見方・考え方を身につけさせるものである。これをとおり、その成果を学習支援や進路支援に生かしつつ、外部に向けた公開発表会を実施するなど包括的なキャリア教育に取り組んでいきたい。</p> <p>また、本校の教育実践や進路実績等の魅力を第6学区の全中学校生・保護者に浸透させ、理解を深めてもらえるよう、戦略的な広報活動を展開していく必要がある。</p>		<p>校訓「自主積極」の精神に則り、自尊心や思いやりの心を尊び、豊かな人間性を育む。また、「生徒」「教職員」「保護者」が協働して学校行事等を創造していくことで、糸高生としての自信、誇り及び感謝の気持ちを醸成する。</p>		<ul style="list-style-type: none"> ・「論理コミュニケーション力」を持つ人材の育成 ・「包括的なキャリア教育」の推進 ・特別支援教育の視点に基づく生徒支援の充実及び人権感覚の醸成 		A	A				
		<p>「主体的・対話的で深い学び」を実施し、未知の状況にも対応できる「思考力、判断力、表現力」を育て、「学びに向かう人間性（等）」を涵養する。</p>		<ul style="list-style-type: none"> ・ICT活用授業の構築による「主体的・対話的で深い学び」の実現 ・一人一台タブレットの活用による個別学習の充実とデジタル社会への適応能力の育成 ・「ICEモデル」による学習支援及び観点別評価の更なる充実 							
		<p>地域Itoshimaから学び、国際的な視野をもつグローバルリーダーとして、持続可能な社会づくりの担い手を育む。</p> <p>新型コロナウイルス感染拡大防止に取り組みとともに、創意工夫を凝らし、部活動、学校行事などの特別活動を安全・安心に実施することにより、学校生活を充実させる。</p>		<ul style="list-style-type: none"> ・学校外の関係機関との積極的な連携 ・学校の魅力化推進、広報活動の戦略的展開 ・「糸高志学」の更なる発展による課題発見能力・問題解決力等の育成 ・「看護・医療系クラス」の学校設定教科「健康」の構築 							
評価項目	具体的目標	具体的方策		評価（3月）		次年度の主な課題					
生徒育成部	教務課	「糸高スタンダード」の充実とICT・タブレット教育の充実	チャイム席、めあての板書、思考を深める発問と言語活動の取組といった、糸高スタンダードの更なる徹底に学校全体で取り組む。更に、ICT・タブレットを効果的に用いたハイブリッド型授業を目指す。	B	B	<p>生徒一人一人に1台端末が貸与されて、多くの学校生活の場面でタブレットが活用され始めた。タブレットを授業で活用することで気付いた問題点等を精査し、タブレットを用いることで得られる教育効果を長期的に検証・研究することで、糸高独自のハイブリッド型授業を目指し、次年度以降も追及していく必要がある。</p> <p>また、来年度から「看護・医療系クラス」がスタートする。「健康」の授業を通して、普段の高校生活では得られない貴重な医療体験ができるように円滑に運営する。そして、この機会に学んだ経験に基づいた自分なりの意見や考えを語る人材の育成を2年間かけて目指していく。</p>	<p>・授業の質は上がっている。</p> <p>・生徒は落ち着いており、授業に集中している。</p> <p>・教員がICTをツールとしての使い方が有効と言いたい。</p>				
		ICT・タブレット教育を「研究授業」のテーマの一つとして掲げ、長期的かつ継続的に取り組む。	A								
		新教育課程の整理と観点別評価の円滑な運営	A								
	生徒支援課	校訓「自主積極」を具現化する生徒の育成	「生徒支援・校則改定元年」として、生徒の自主的な姿勢を推進させ、地域の課題解決に主体的に関わる生徒育成を支援していく。学校内外での挨拶の励行等、善行を促す積極的生徒指導を推進する。	A	A			<p>学校出席率の低下。生徒の基本的な生活習慣の確立。生徒支援・校則改定の2年目で、生徒指導提要の改定に伴う積極的生徒指導の充実・実践を軸に個別対応（配慮事項）や組織的対応。学校行事では生徒が計画段階から運営に関わる体制の構築。校則（生徒心得）では、生徒の実情を鑑み、定期的な校則見直し検討の実施。いじめや問題行動に対する初期対応の取組み。部活動環境整備として平日の部活動指導手当の見直し。教員の負担軽減として、休日の活動における部活動指導員を活用するなど地域移行の推進。学校安全面での防犯カメラの複数設置。家庭環境が不安定な生徒の把握。</p>	<p>・校則を生徒の意見を聞きながら変更したことはとても評価できる。</p> <p>・タブレット、スマホへの依存を防ぎ、人との対面によるコミュニケーションの重要性について啓蒙する必要がある。</p>		
		安全で安心できる学校環境整備の推進による学校生活の充実と、生徒理解による個に応じた支援	学校課題の共有を職員と生徒が共に考える場面をつくり、善行を促す積極的生徒支援推進する。	A							
		「報・連・相」を徹底し、各式典、学校行事等、総務及び各関係分掌との連携を密に行い、諸行事の完成度を高める。	いじめ件数「0」を目標に、いじめアンケート及び家庭用アンケートを活用し「校内いじめ防止基本方針」に基づき、未然防止、早期発見、解決に努める。教育相談日を設定し、個に応じた指導・生徒理解につなげる。	B							
	庶務課	式典（入学式、卒業式、創立記念式）や学校行事の円滑な運営	業務の標準化・情報化を行い、全職員が組織的・協働的に運営できる環境をつくる。	A	A					<p>○感染症予防に留意しつつ、行事の正常化に努める。すべてを元に戻すのではなく、糸高チャンネル等、有効に活用していく。糸高チャンネルで実施する場合、準備やトラブル対応できる職員が限定されているので、一部の職員の負担感が大きくなっている。よって、すべての職員が使えるように周知徹底していく。</p> <p>○大規模改修工事やクラス増の影響で机・椅子の管理が難しくなっている。管理場所を確認しながら、計画的に利用できるよう準備していく。</p>	<p>・創立120周年記念式典が無事に盛大に行えたことは評価できる。</p> <p>・校舎改修工事に伴う教室移動、机椅子の管理を丁寧にして欲しい。</p>
		机や椅子、テント等の備品を適切に管理し、校内の学習環境の向上	事務室の職員と連携し、机や椅子、テント等の備品購入に関する規格の統一を図る他、校内の用具補修を適切に行う。	B							
		机や椅子、テント等の備品管理手順について標準化および情報化を進め、効率よく利用できるようにする。		B							

項目ごとの評価 学校関係者評価委員会からの意見

キャリア教育推進部	キャリアサポート課	生徒一人一人が自身のキャリアを深く考え、進路選択に繋がる充実した3年間を送れるようにサポートしていく。広い視野を持って、文理を超えてものごとを多面的に見る力を養う。	「糸高志学」（総合的な探究の時間）での学びや、論理コミュニケーションを有効に活用し、生徒が自分の能力や経験などを明確化・言語化して伝えることができるようにする。	B	B	生徒一人ひとりが自身のキャリアを深く考え、進路選択に繋がる充実した3年間を送れるようにサポートしていく。糸学課と連携して、「考える力」「書く力」「伝える力」を養い、社会で生きていく力を身に付けことができるように支援する。1年次では「大学訪問」「論理コミュニケーション」や「糸学」、2年次では「糸学」「小論文講座」「大学出張講義」などの進路行事、3年次では「糸学」「小論文講座」「大学入試個別指導」などを充実させていく。特に3年生では国公立大学推薦入試に対応するため、大学入試対策講座の指導体制の強化を図る。	B	・進路支援の取組みが適切で功を奏している。 ・保護者に対して、「どの大学に行く」ではなく、「大学で何をする」が寛容であることを伝える必要がある。					
		アフターコロナを生き抜くために、入試改革やコロナ禍による困難を乗り越える力、将来の見通しを持たせることで、進路実現へ向け、主体的に学ぶ力を育てる。	大学訪問や大学出張講義などの進路行事を通して、大学・学部・学科への理解を深め、専門的な内容に挑戦させるなど経験を多く取り入れる。 3年生対象の大学入試対策講座や、小論文学習など積極的に実施する。放課後の自習室利用などを通して主体的な学習へと導き、「学び続ける生徒」を育成する。	A				A					
		保健安全課	生徒が心身共に健康な生活を送れるよう、職員間の共通理解を図り、支援に役立てる。新型コロナウイルス感染拡大防止に取り組み、「感染しない」「感染を拡大させない」よう、対策情報の発信、感染症対策を徹底する。	保健だよりを毎月発行し、感染症・熱中症（夏季）等に関する健康情報をタイムリーに提供することで、疾病や事故の予防、感染症予防に努め、生徒の健康管理能力向上に役立てる。 関係職員での情報交換を密にし、生徒の疾病や新型コロナウイルス感染症対策、心の問題などを、早期発見、早期対応し、保護者との連携を図る。また、状況に応じて、管理職・生徒支援課・教務課・特別支援コーディネーター・外部機関との連携を適切に行う。				A	A	B	保健情報の提供による、感染症や熱中症対策については一定の成果が得られた。今後、情報提供の方法についても改善していく必要がある。また、感染症の後遺症などについても、職員間で情報共有が必要であると考えられる。 「性の相談」「心の相談」・スクールカウンセリングについては、生徒や保護者へのお知らせの方法を工夫し、感染症の影響を受けずに実施できるよう、オンラインでの実施についても検討する。また、教員が生徒の問題を相談できるよう、調整する。 年度初めに、清掃の基準について、監督者が共通認識を持って指導に当たれるよう工夫する必要がある。	B	・校舎改修工事の関係で、一部雑然としているところはあがるが、全体的に校舎内がきれいにされている。 ・感染症・熱中症等への対応は適切であると評価できる。
			清掃活動の徹底を行い、「きれいな糸高」を全職員・生徒で実現する。校内美化活動を通して、奉仕の心、感謝の気持ちを醸成し、心の教育を行う。	美化コンクールの実施（2学期）やワックスがけの実施（5月、10月、3学期）により、校内の環境美化を推進する。 毎日の清掃時の作業効率の向上を図るとともに、大掃除や定期考査前の教室点検を実施し、各学校行事にあわせた環境整備（学校視察・PTA総会等）を行う。				B	B				
糸高未来構想部	研究開発課	教師一人ひとりの資質・能力の向上および授業改善につながる校内研修の充実	本校の課題認識および解決のための校内研修会を年5回以上実施する。 相互授業参観の実施強化週間・授業アンケート（Googleフォーム活用）を年2回以上実施する。	A	A	校内研修の内容・研修方法等（Zoom研修、タブレット活用）について工夫を重ねていく。経験年数が異なる教師同士が相互に意見交換をしながらスキルアップできるような雰囲気を作っていきたい。人権教育特設授業については新しい視聴覚教材の選定を必要とする。糸高文林の制作に当たっては、Googleクラスルームによって原稿回収ができるようになったので、今後も積極的に活用していく。業者とのやり取りも可能な限り、電子データで行うようにする。図書館利用については、小論文対策、職業研究、総合的な探究の時間等で図書館を積極的に活用できるレイアウトにする。	A	・校内研修のテーマ設定が、教員の資質向上のためとなるようにされている。 ・図書館利用について図書館のレイアウトやコンテンツのデジタル化と工夫をする必要があるのではないかな。					
		図書・視聴覚教育の更なる充実	創立120周年記念号第71号「糸高文林」は、糸高の文化を創造・表現する機能、年間の活動記録の機能を継承・発展させる。 図書館オリエンテーションを実施し、図書館利用者の増加を目指す。視聴覚教材を用いた授業を充実させる。	A	A								
		糸高志学課	生徒と教師が共に学ぶことで、「糸高志学」（総合的な探究の時間）を「活かした学び」とする	教科横断的な学習体制を構築する。また糸島市役所・大学・外部団体等との連携を図る。 ICT、論理コミュニケーションを活用して、まとめ方、伝え方などの探究の技法を充実させる。	A			A	B	「高度な情報化社会であるSociety5.0社会を生きていく力」＝「身の回りに生じる様々な課題を発見し、自らその解決に向けて、他者と協働して解決方法を探り出していく力」この力を「糸高志学」を通して培うという目標を改めて、職員間で共有する。その上で、各学年での取り組みを行うことで生徒の成長が期待される。外部団体との連携を更に強化し、新たな連携も求め、新しいことへの挑戦を続けていく。論理コミュニケーションのスキルを探究のプロセスに活用する方法を構築し、思考力・表現力を高め、生徒の進路実現へつながらうに進めていく。遠隔授業などを活用し、福岡に居ながらにして高度な文化や科学技術に直接触れることが出来る機会を増やす。			
			各学年主導での「糸高志学」（総合的な探究の時間）の円滑な運営を実現する	職員研修等で情報共有をはかり、学年の責任者を設定して、学年ごとに実務の分担を行う。 グランドデザインで学年のテーマを明確にし、学年におけるコンテンツを充実させる。	B			B					
糸高未来構想部	研究開発課	GoogleClassroom活用方法の提案	授業にて積極的にClassroomを活用し、その手法を教職員に提案する。 Chromebook貸与が開始された学年からスムーズに扱えるように準備を進める。	A	A	全生徒にChromebookを貸与したことを受け、Chromebookが特別なものではなく文房具の一つとして扱われるよう、まずは研究開発課が自分の授業で活用し、その成果を各教科で共有するような流れを作ることが次年度の課題である。同時に、カレンダーやキープといった今まで扱っていなかったアプリケーションの活用方法を模索することも課題である。 また、Teamsについては今一つ有用な活用方法が見出せなかった。引き続き試験的に扱いつながら、Teamsでなければできないことを研究していくことが課題である。	A	・タブレット等のICT機器を活用した授業が多いと感じた。 ・タブレットの活用法について、根拠を探し、検索スキルアップを図る、思考することを目指すことが肝要である。					
		校務改善方法の提案	Formsを活用した授業アンケートの結果を適切にフィードバックするシステムを作成する。 Teamsを試験的に運用し、校務改善につながる利用方法を模索する。	A	B								
		広報戦略課	広報活動のさらなる充実	高校選択を左右する「中学体験入学」の内容を再度検討し、本校の新たな魅力を発信する。 来年度新設される、医療・看護系クラス実施の説明。また、アンケート調査による、生徒・中学生・保護者、学習塾関係者などからの情報分析を行う。	A			A	A	・中学校第3学年担任団への説明は効果があった。 ・体験入学への参加者を増やす方策を検討する必要がある。 ・小学生への広報を考えてはどうか。			
			広報媒体の充実	公開授業でのアンケート調査を基に、本校に求められる教育活動の工夫・改善を行う。 新たに導入されたホームページへの更新を効果的に活用し、リアルタイムな情報の発信を行う。	B			A					
糸高未来構想部	ICT・情報課	ICT環境やネットワークの整備と拡充	1人1台のChromebookを生徒が主体的に活用できる環境づくりに努める。 糸高チャンネルや各種ICT機器の整備・拡充を通して、学校活動の様々なニーズに対応できるようにする。	A	A	1年生の1人1台体制を年度初めから実施したことやネットワークも改良され1人1台環境が成立した。今後は約1000台の運用体制や管理が課題となるだろう。「糸高チャンネル」用に常設できる場所を確保したい。高性能WEBカメラや集音マイク、360°カメラ、VRゴーグルなど機器の種類が増えたので普及を目指したい。学年・各部活動へのiPad配備が終わりSNS発信環境が整った。次年度はHPとSNS、それぞれの更新を持続的にやりたい。今年度も職員向けGoogle研修を実施できた。一斉メッセージは使用できる教員が増え、アンケート機能の活用も見られた。遅刻欠席連絡システムも安定運用できた。データのバックアップと整理することができた。個人貸与USBメモリの廃止、校内用データ持出USB作成、Gドライブの活用推進を行った。	A	・授業中にタブレットがフリーズなどが起こることなかった。 ・ICT機器を活用して生徒間、教員生徒間のコミュニケーションをいかにとるか、課題であろう。					
		外部・内部へ情報発信手段の確立	ホームページやSNSを通して、糸高の魅力が容易に継続して発信できるような環境づくりを行う。	B	A								
			「一斉メッセージ」や「遅刻欠席連絡システム」の運用を通して、家庭と学校の安定した連絡手段を確立する。	A	A								

学年支援部	第1学年	基本的な生活習慣を確立させるとともに、何事にも誠実に取り組み、最後まで努力を惜しまずやり遂げる自律心と思いやりの心を持った人材を育成する。	「18歳成年」を念頭に置き、挨拶、礼儀、服装、話を聞く姿勢など、社会人基礎力を高める。	A	B	○コロナ禍で安易な欠席や遅刻が増加傾向にある。学校に来て学ぶ意義を実感させたい。出席率の向上を目指し、時間を守ること、挨拶・礼儀（コミュニケーション能力）、人の話の聴き方を教育活動のすべての場面で支援、指導する。配慮を要する生徒に対して、保護者や養護教諭、特別支援コーディネーター、外部機関との連携を密にし、学年、学校全体で支援する体制を整えていく。部活動加入率増加（特に生徒会執行部の発掘）への方策として、学年集会等での呼びかけを行う。 ○chromebookの積極的な活用はできているので、試行錯誤しながら、生徒の学習習慣の改善や向上に繋がる効果的な活用法を模索し、共有していく。論理コミュニケーションを通して、自分の考えを持ち、整理して伝えることを学ぶことができていた。この表現力を次年度、本格的に始まっていく糸高志学に繋げていく。	A	・高校生活へソフトランディングできるようによく工夫されている。 ・コロナ禍とはいえ、集積に対する生徒・保護者の意識が低いのが気になる。大変だろうが、指導・支援が必要だろう。				
			集団に参加する意識を高めるために、部活動加入を奨励する。また様々な校内外の行事への参加を促す。	B								
		家庭での学習習慣を定着させ、自発的・計画的に学ぶ力を身につけさせる。進路意識の早期確立に努め、より高い目標を掲げて努力する姿勢を育てる。	知的好奇心を高め、主体的かつ意欲的に学習に臨む姿勢を身につけさせるための授業を実践する。Chromebook使用し、ClassroomやTeamsを効果的な活用を促す。	A								
			「糸高志学」（総合的な探究の時間）を通して多角的思考力を養い、「論理コミュニケーション」を通して自分の考えを持つこと、論理的に表現する力を養う。	A								
	第2学年	生徒、保護者、教師の三位一体の信頼関係を築く。また基本的な生活習慣を確立し、自律心と思いやりの心を持った社会性豊かな人材を育成する。	社会人としての資質・能力を高めるため、学校行事や校外教育活動に積極的に参加させ、ミドルリーダーとしての自覚を持たせる。	B	B		○成績上位層を増やす取り組みとして10月より週2回放課後に数英のレベルアップ講座を実施した。このような任意の講座にいかん意欲的に取り組む生徒を増やしていくかが課題である。 ○多様化する大学入試に対応するために早期からの進路意識と具体的な取り組みが必要である。新年度早々にも小論文や志望理由書作成に向けた講演会を実施していきたい。 ○修学旅行での企業訪問、特にGoogle本社訪問や糸高卒業生の方の会社訪問は視野を広げるいい機会となった。このような場を今後も定期的に企画・提供していくことで生徒の進路意識の確立に繋がっていくと考える。		B	・修学旅行がしっかりと実施できたのは良かった。生徒が成長できる良い機会となった。 ・3年生に向けて、進路実現のための方策をキャリアサポート課と協力して作ることが肝要である。		
			多様化する生徒（保護者）に対して学年全体で対応し、特別支援コーディネーターや養護教諭、SCから協力を得ながら、生徒へ適切な支援を講じる。	A								
		志を持って意欲的に学ぶ姿勢を身につけさせ、「思考力・判断力・表現力」を育てる。	「糸高志学」（総合的な探究の時間）を通じて、社会的視野を広げ、地域の抱える課題をグローバルな視点から協働的に探究していく力、表現する力を養う。	B								
			大学オープンキャンパス、大学訪問、大学出張講義、修学旅行での企業・大学訪問等あらゆる機会に主体的に取り組むよう促す。また「学年独自の時間」を有効活用することで自身の課題を設定し、学び続ける姿勢を養う。	A								
	第3学年	保護者、生徒、教師の信頼関係を固くし、自律心と挑戦する心を育て、社会に貢献できる人材を育成する。	保護者会や一斉メール等を通して、学年指導の目的と方針を丁寧に伝えることで、急激に変化する社会を生き抜く力をつけさせるための教育への理解と協力をあおぐ。	A	A				○3年間のコロナ禍を通じて学校を欠席することへのハードルが下がっており、新しい環境への不適應を起こす生徒の増加や、学力の二極化がさらに進むことが懸念される。それを防ぐためにも、生徒だけでなく家庭環境を理解したうえで個別に細やかな対応をする必要がある。 ○ますます個別化・多様化する大学入試に対応するために、大学に関する情報を常に与え続け、また大学へ実際に足を運び、新しい世界へ踏み出すための刺激を与える。それにより自律的に学習に取り組む姿勢を育み、志の高い集団をつくる。		A	・入学式ができなかったなど、新型コロナウイルス感染症に振り回された3年間だったが、「できるようにするためには」を考え実現させていったことは称えられることである。
			社会に貢献できるよう学校行事や校外教育活動に積極的かつ主体的に取り組ませ、最高学年としてリーダーの自覚を持たせる。また、国際社会を視野に入れ、世界で行動できるグローバルなものの見方を養う。	A								
		社会的課題に自分事として向き合い、生涯を通して学び続ける姿勢を育成する。進路意識を高め、最後まで諦めない心を養う。	キャリアサポート課と連携を図り、新しい大学入試に対応できるよう放課後課外の学習内容を検討する。また、個別対応を充実させ、進路実現に向けて主体的に粘り強く取り組む姿勢を養う。	B								
			二者面談等を通して、早期に的確な進路情報を提供することで、高い志を維持できるようサポートする。志望校の早期選定を図り、目標を明確化させることで、努力し続けられる集団を育成する。進学がゴールではなく生涯学び続ける態度を育てる。	B								

自己評価及び学校関係者評価を踏まえた今後の改善策

- ・生徒の学力差や学習状況を踏まえ、よりきめの細かい学習指導・支援を行うために、習熟度別クラス編成を3段階にする。さらに、授業改革に取り組み学力伸長を目指す。
- ・遠隔オンライン授業など、ICT機器を活用した授業の質の向上を目指す。その様な授業をとおして、思考力の向上、検索能力の向上などを目指す。そのために、教科主任会を活性化させる。
- ・スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーと連携し、生徒理解、情報共有に努める。そのために、職員研修を開催し教員の生徒理解に関する資質の向上を目指す。
- ・18歳成年を意識し、自分で考え行動できるようにできる人材となるように、1年時からの指導・支援を適切に行う。

評価項目以外のものに関する意見

募集人員が増えたとはいえ、定員割れであった。その要因を分析し、生徒募集の方針や方法を考える必要がある。広報活動が重要になる。